

## 第3回検討会における主な意見等(案)

## 【委員発言要旨】

## (1)教育内容等に係る考え方

- 子どもたちに主体性がないと決めつけないほうがよい。価値観、発想を変えることは簡単ではないし、誰かが頑張れば変わるものでもない。必ずしも教育によってすべてが変わるわけではないが、いろいろな仕掛けを作りながら、子どもたちに刺激を与えられるように働きかけていきたい。
- 他の選択肢があるうえで、丹後を選んで、働いてくれる、住み続けてくれる子どもをどう育てていくのかというところがポイント。
- いわゆる詰め込み型の教育から脱却するということをしっかりと一番に示す必要がある。
- 高等学校までの学びの中で、自分たちがゼロから積み上げていく、そしてその成果が自信になるというような学びを入れ込めるとよい。
- これまで取り組まれてきた SeaLabo の STEAM 教育を基礎に置いて、さらに発展させることで、確実な内容が組み立てられると思う。
- 高校の教員は探究的な学びのイメージをまだ十分持っていない。市内高校の普通科では、職業系の専門学科に比べて地元産業との連携ができていない。大学進学に向けての教科科目中心で、探究学習の時間が少なく余裕がない。
- 不審者侵入の訓練に正解はないが、毎年同じパターンで実施する学校がある一方、打合せでこんなパターンをしましょうという意見がすごく出てくる学校もある。教員も大人も考えてするのか、形だけするのかで本当に違う。カリキュラムが大変、大学に進学させるための授業が大変というのはわかるが、より良くするためにどうしたらいいのか、一生懸命考えるのが大事。大人と一緒に楽しんで、一生懸命やっている様子を見ると、子どもも楽しく真剣に取り組めるようになる。そういう大人がいる地域に自分も住みたいなとか、ここで働きたいという気持ちになると思う。
- 探究的な学びは何を学ぶかではなく、学び方を学ぶものであり、プロセスが大事。プロセスを知っていれば、課題が発生したときに自分で対応できる。教員はサポート役で主役ではないが、主体性がある教員がファシリテートすることで、主体性とは何かを生徒に示せるため、教員の主体性も重要。
- 探究的な学びをするにあたっては、正解がない問題に取り組むことに、先生が耐えられるかどうか。間違ってもいい、質問されても答えられないという恐怖に耐えて、先生も一緒に取り組むという発想を持つことが必要。
- 探究的な学びにあたって、教員がいかにもうまくファシリテーションをするかについては、各々のやり方や考え方、どういうプロセスでその結果が出たのかについて、先生方で話し合いをすること。教員全員の底上げのために、ファシリテーター同士でその情報交換をしていくことが、とても大切である。

- 教員のファシリテーションをスキル化するというよりは、生徒と教員の関係性として、どういう場になったらいい学びになっているのかを、お互い共有し合うことだと思う。教員がこうやれば必ずこう行くということではなく、相手がいて、それに合わせてやっているかどうかという、関係性でとらえていく視点が大事。
- 子どもに主体性を持って欲しいと思うのは、大人の押し付けなのかもしれない。子ども、若い人たちは、言われてやるのが楽でいい、それが幸せだと思っているのかもしれないので、雇用する側とのギャップが大きくなっていると感じる。
- 出口がうまくいくモデルがあれば、変わってくると思う。学力的な選抜で大学に入った学生よりも、探究的な学びをした学生が能力を発揮するというような成功例を作ることは大事だと思う。また、高等学校だけ単独で実施するのではなく、中学校での取組を継続して、中高連携で実施できるといい。
- 探究学習をするときに、協力したい産業界とつながるにはコーディネーターの存在が不可欠だと思うが、生徒が学びたい、話を聞いてみたいと思ったときに、軽やかに学校、生徒と企業がつながれる手段として、ネットワークを使えたら良い。IT的なネットワークを含めた環境整備にトライできると面白い。
- 民間企業と接続するにしても、学校の中で探究的な学びを進めていくにしても、クラウドが簡単に、しっかり使える環境整備が必要。クラウドに接続する環境を中心とした、学校の環境整備に力を入れるとよい。

## (2)教育制度に係る考え方

- 実効性があり、持続可能なものにしていくには、リソースをどう確保していくかということ。とりわけ人材の確保が必要。新たな制度や取組をしていくためには、それを担う現場の先生方の確保や環境整備をする行政側の人材確保が、組織的に機能するために必要。人材の確保は、一朝一夕にできるものではないため、なるべく早く人材確保のために動く必要がある。それには当然予算の裏付けが必要になる。
- 都道府県立高校の市町村運営という考え方は、今の制度の枠内でもできるという考え方だが、持続可能性を考えるのであれば、学校全体をいきなり市で運営するのは難しい。そうであれば、例えば学科を市が運営するという考え方はあると思う。
- 教員を信頼する生徒がいるからこそ、すばらしい学びが可能になってくる。信頼性を大切にするのであれば、教員の負担をなるべく増やさない形で、改革ができればいい。

## (3)地域・産業界との連携に係る考え方

- 多くの資源がある京丹後において、子どもたちが様々な産業を体験できるような機会が充実すればいいと思う。一方、学校から企業に依頼する際に困難さがあるので、学校のニーズを相談できるような場があるとよい。
- 学校側も産業界を頼りたいという思いはあって、産業界も関わりたいという思いは

あるが、学校からオファーを待つだけでなく、企業側からもこんなことができるというのを発信すべき。ただ、学校側が情報収集できないということもあるので、両者をマッチングできるプラットフォームがあればいい。生徒が興味ある、やってみたいと思ったときに、フラットにすぐ企業とつながれるような仕組み。1人の生徒のためにも、話に行くぐらい企業は人材育成にコミットすべき。

- 学生、学校からアピールしてほしいと思う反面、企業側からも投げかける手段がないかと模索はしていたところで、マッチングできるプラットフォームさえあれば、すぐ企業とつながられる。ものづくりに興味を持ってくれる子どもたちと話ができる機会があるのはありがたい。活発に交流するためのプラットフォームがあればとても素晴らしいと思う。
- 地域と学校をつなぐコーディネーターの存在が大事だと思うので、ぜひ盛り込んでいただきたい。